

「水口鉄人の絵画：現実空間との接続面に」

藪前知子（東京都現代美術館学芸員）

カンヴァスの上に貼られたテープは、最小限の手つきでありながら、絵画というジャンルの歴史的な文脈を召還する可能性を孕んでいる。抽象絵画の嚆矢のひとりであるピート・モンドリアンは、絵画をそれ固有の要素へと還元していく追求の終わり、最晩年のニューヨーク時代に、当時発売されたばかりのスコッチ社のテープをカンヴァスに貼付ける。イヴ＝アラン・ボワは、このテープを、単なる下描きではなく、テープが重なり合う箇所、視覚的厚みと物理的厚みの相剋を指摘し、新たな絵画経験の萌芽を見た。ところで、水口鉄人の作品に現れるテープのモチーフは、実物でも描かれたイメージでもなく、精巧に模造された物質が接着されているものである。しかも、この真っ白なカンヴァスは、慣習上、絵画と見なすこともできるが、そうでなければ単に木枠に貼られた麻布という物体である。私たちは水口の作品の前で、その物質性を感知しつつ、イリュージョンを捕まえようとする。言ってみればそれは身体と眼の相剋であるが、そのはざまに出現する絵画の経験は、具象と抽象という既存の絵画の二分法を軽々と超える豊かさに満ちている。

本展に出品されるもうひとつのシリーズは、二枚の画面を大量の絵具を挟んで圧着させてから引きはがし、凹凸のあるシンメトリーを作る、デカルコマニーの手法を用いたレリーフ作品である。ここでも水口は、描くという行為の恣意性、さらにはそこで否応無しに発生する、地と図という関係

性の恣意性の克服という、抽象絵画の成立に寄与した歴史的な問題系に、鮮やかに言及しているように見える。しかし忘れてはならないのが、水口がこれらの作品を通して、絵画的要素の還元というアナクロニックな議論ではなく、絵画と現実空間との接続面というアクチュアルな問いを投げかけていることだ。水口の初期作品には、師である柳幸典が立ち上げた広島アートプロジェクトで発表した《路上山水図》というシリーズ作品がある。河岸の外壁の汚れをこすり落として水墨画を描いたもので、まさに「絵画なるもの」が社会空間に発現する瞬間を捉えたものと言える。空間における異物であること、それでもなお絵画であること。そのあわいの無数の可能性の探求を今後も期待したい。



《路上山水図》「UTOPIA」アートベース百島, 2012
Landscape Drawing on the Wall,
UTOPIA, ART BASE MOMOSHIMA, 2012